

—

あいちトリエンナーレ 2010 Aichi Triennale 2010

—

〔テーマ〕	都市の祝祭 Arts and Cities
〔開催時期〕	2010年8月21日〔土〕－10月31日〔日〕(72日間)
〔会場〕	愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、長者町会場、納屋橋会場 ・その他、名古屋城、オアシス21、中央広小路ビル、七ツ寺共同スタジオなど
〔主催〕	あいちトリエンナーレ実行委員会、愛知芸術文化センター、名古屋市美術館
〔芸術監督〕	建畠 哲(国立国際美術館館長)

—

あいちトリエンナーレ2010は、
 名古屋市の中心街・栄地区をメイン会場とした都市型のフェスティバルとして、
 現代美術とパフォーミング・アーツの領域を横断する形で開催された。
 「都市の祝祭 Arts and Cities」をテーマに、国内外130組以上のアーティスト・団体が参加。
 作品の多くはここ愛知でしか見られない新作または日本初演で、
 美術館や劇場のみならずまちなかへも飛び出し、
 都市の日常風景の中に魅惑的な光景を出現させた。
 街がまるごとアート空間となるスリリングな都市の祝祭で、来場者数も57万人を上回る結果となった。
 パフォーミング・アーツ部門は、複合文化施設である愛知芸術文化センター内の劇場やギャラリー、
 まちなかを会場とし、あいちトリエンナーレ開催期間を通して、
 ダンス、演劇、パフォーマンス、映像、ヴィジュアル・アーツといったジャンルを超えた、
 複合的かつ世界最先端の表現芸術が紹介された。

関連シンポジウム

あいちトリエンナーレ 2010 / パフォーミング・アーツ オープニング・シンポジウムⅢ 「劇場における国際芸術祭の可能性」

あいちトリエンナーレ 2010 パフォーミング・アーツ部門では、オープニング・シンポジウムⅢ『劇場における国際芸術祭の可能性』が開催された。地域の劇場を拠点としたパフォーミング・アーツのフェスティバルの現状と課題について、現在日本の舞台芸術の最前線で中心的役割を担う方々の話を伺いながら、都市における国際芸術祭の可能性について考える場となった。そこでは、通年で運営されている地域の劇場とフェスティバルをどのように関係づけるのかというアートマネジメント的課題が浮かび上がった。

日時:8月22日[日]16:30 開演 | 会場:愛知芸術文化センター・小ホール

パネリスト 平田オリザ (劇作家、演出家、こまばアゴラ劇場芸術監督・劇団「青年団」主宰、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、内閣官房参与)
宮城聡 (演出家、SPAC 静岡県舞台芸術センター芸術総監督)
下山久 (キジムナーフェスタ〈国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ〉プロデューサー)
久野敦子 (公益財団法人セゾン文化財団プログラム・ディレクター)
唐津絵理 (あいちトリエンナーレ 2010 キュレーター 〈パフォーミング・アーツ〉、
愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)
司会 藤井明子 (あいちトリエンナーレ 2010 コーディネーター 〈パフォーミング・アーツ〉、
愛知芸術文化センター愛知県文化情報センター主任学芸員)



劇場は世界の窓

—

平田——現在実行委員長をつとめる「BeSeTo演劇祭」は、Beijing(北京)、Seoul(ソウル)、Tokyo(東京)という各国の首都の頭文字をとって名前がつけられていて、もう17年続いています。日・韓・中の演劇人の出会いの場となっています。続けてきたことによって、韓国も中国も演劇がやわらかくなってきていますし、接点を持ち続けることが大切だと思います。

宮城——「Sizuoka 春の芸術祭」では、世界中で今まさに生まれてくる表現を様々な紹介しています。これからの世界は、どれほどそれを嫌がろうとも多様化していきます。自分たちと異なる様々な他者が、たくさん日本に集まってくる。それは避けようのない未来です。だから特に若い人には、内向きにならないで、世界に対してもう一度鍵を開けて、窓を開いて欲しい。

唐津——「多様性」は現代芸術の重要なキーワードだと思います。ヴィジュアル・アーツとパフォーミング・アーツというジャンルの棲み分けを極力排して開催したあいとりエンナーレから、現代人が学び取っていかなければならない寛容性が浮かびあがってきた。ジャンルを細分化していくのではなく、他者が共同して、超えていく、相互理解の重要性を同時代のアーティスト自身が示してくれていると感じています。

—

フェスティバルの機能

—

平田——青年団の場合、海外では劇場との共同製作があって、そこからツアーがスタートするのでいわゆるフェスティバル・マーケットとは違うのですが。ヨーロッパにはフェスティバルという流通マーケットと劇場中心のマーケットがあります。ク・ナウカや青年団が初めてヨーロッパに出て行ったころは、ただやみくもにという感じでしたが、チェルフィッチュやその次の世代が出て行き始めて、やっと戦略的にフェスティバルに出るとか回していくとかいうことを意識できるようになってきています。

久野——ヨーロッパの場合はフェスティバル・マーケットがあり、ディレクターたちはより良い作品を自分のフェスティバルで紹介したいということで探しまわっています。そのフェスティバルで素晴らしい作品が上演されればされるほど、フェスティバルのステイタスが上がり、人が集まるというサイクルがあります。特に、「プレミア」ということは重要で、それくらい自分のところでやる意味を探しています。

下山——「ロボット演劇」のようなジャンル横断的な作品のように、実験的なアートの上演の機会があることによって、その後のアートの流通にもなんらかの変化を起こすのではないかな。

宮城——フェスティバルの機能の一つとして、アーティスト同士の交流が必要。それによって、アーティストが行きたいと思うモチベーションになるし、実際アーティストとして行って良かったと思えるのはそういうフェスティバルです。

唐津——130組を超えるアーティストが参加しているトリエンナーレですから、それぞれのアーティストが繋がりをもてる仕掛けも考えたい。〈ボーダレス・カフェ〉では同時期に愛知に滞在しているアーティスト同士になるべく互いの作品を鑑賞してもらい、語り合う場を設けています。

—

ネットワークをつくる

—

下山——「キジムナーフェスタ」ではアジアの他のフェスティバルと連携を組んでいます。ソウル、

台北とはネットワークができていて、ヨーロッパからの招聘も行っています。一時期は上海とも連携を組んでいました。

宮城——フェスティバルディレクター同士が同じテーブルについて、アーティストと一緒に呼んだり、すみ分けをしていくことも必要。ディレクター同士の信頼関係を早く作っていくことが求められている。

久野——日本でも劇場同士のネットワークをつくって作品を巡回していく流れがあり、フェスティバルも増えてきて、国内でもマーケットが生まれてくる可能性があると思います。フェスティバル／トーキョーに加え京都国際舞台芸術祭、あいちトリエンナーレも始まりました。

唐津——あいちトリエンナーレの開催が決定したときから、この機会に国内の劇場とのネットワークを強化しようと考えていました。ローザスでは埼玉、静岡、ヤン・ファールでは伊丹、金沢、高知と一緒に共同招聘を行いました。劇場付きの舞台技術スタッフにツアー全体のテクニカルディレクターとして関わっていただいたことは、日本ではかなり画期的な試みだったと思います。

—

共同製作

—

平田——基本的にはお金を出し合うということで、主幹の劇場がほとんどつくっています。グローバル・スタンダードで考えても、共同製作はお金のことです。どこでつくられたかはあまり問題ではなくて、初演権がどこにあるか、ということが重要です。

世界の代表的なパフォーミング・アーツ・フェスティバル

アヴィニョン演劇祭

1947年に始まった、新作発表の規模と数においてヨーロッパで一、二を競うフェスティバル。2004年からアソシエート・アーティスト制をとり、毎年異なるアーティストがプログラムの選定をつとめている。近年の総演目数は40前後、メインの会場であるパレ・デ・パッブ(法王庁宮殿)の中庭、キャリエール・ドゥ・ブルボン(石切り場)など、アヴィニョン市内約20カ所のさまざまな施設で上演が行なわれ、ほぼ市の人口に匹敵する10万人が町を訪れる。なお、フリンジ=自主公演での参加は900-1000にものぼる。

—

クンステン・フェスティバル・デザール

ベルギー・ブリュッセルで毎年5月に開催されているパフォーミング・アーツを中心とした現代アートフェスティバル。先鋭的なプログラムで知られ、世界の現代アート界のアンテナフェスティバルとも称されている。ベルギー国内はもとより、ヨーロッパ全域、さらには芸術支援インフラに乏しい発展途上の国々に及ぶ世界の若手アーティストを独自に発掘し、多くの作品プロデュースを行っている。また、長期的視野に立ってアーティストの育成を図るため、複数年にわたり共同制作を行うと同時に、ベルギーやヨーロッパに拠点を置く実力派アーティストの新作を製作し、世界に先駆けて発表している。世界のパフォーミング・アーツの潮流を生み出す震源地の一つ。プロデュース公演と共同製作公演が、プログラム全体の50パーセントを超え、世界初演が約半数を占める。

久野——新しいものをつくるだけではなく、ネットワークをつくっていく。一つの劇場だけ、フェスティバルだけでつくるのではなく、コ・プロダクション=共同製作が必要。製作スタッフがいて、つくる場所があって、途中経過を見てくれるお客さんやスタッフがいる、という意味では劇場の可能性はポテンシャルが高いと思います。

唐津——あいちトリエンナーレ製作作品については、第1回目はチェルフィッチュ、青年団や大阪大学、ニブロールというカンパニーそのものとの共同製作という形をとりました。これからは同じ志をもつ国内外の劇場やフェスティバルとも共同製作を模索していきたい。そのためには、愛知芸術文化センター自体の創造機能の強化が必須だと思っています。

—

地域性

—

下山——沖縄は子どもの人口比が全国1位です。そのことを背景に「キジムナーフェスタ」をスタート。子どもたちのため、ファミリーのためのフェスティバルを行っています。家族で感動体験、親子で感動体験、仲間で感動体験がコンセプトです。演劇を中心として、パペットやダンス、ヌーボーシルク系の新しいサーカスや伝統芸能など、様々なジャンルのものを招聘しています。子どもたちが優れた文化体験を享受することで、未来の人材育成に寄与するものとなっています。

唐津——フェスティバルを開催するにあたって地域の得意な分野をどのように生かしていくかという課題がありました。愛知県の場合、自動車産業のような「ものづくり」に特化している地域ですので、トリエンナーレのジャンルの「横断」というテーマの中でも、「ロボット演劇」に取り組むことで、アートと科学の共同という視点を打ち出しました。これは客層の広がりにも繋がりました。ほかにも地元の若手のアーティストとどのような関係をもっていくのか、真にこの地域から発信できる作品やアーティストを育成することが重要となってくると思います。

愛知芸術文化センターのこれから

唐津絵理

日本における劇場法(仮称)導入の提言と、愛知県における国際芸術祭の開始、平成22年度の当地域の芸術界におけるこの二つの大きな契機に際し、開館から18年度経過した公立文化施設・愛知芸術文化センターもまたその役割を大きく見直す時期を迎えている。そこで今年度の「アートマネジメント基礎講座」では、「劇場法」の基盤となるべき「劇場の理想的な運営」と、あいちトリエンナーレで取り組んだ街づくりの視点から「都市と地域と芸術文化の振興」の、二つのテーマに沿って講義を依頼することにした。これらの講義を通して、「愛知芸術文化センター」という複合文化施設の今後の運営方針と、「あいちトリエンナーレ」という地方都市の国際芸術祭の在り方について、この地域の人々と共に考えてみたいと思っていたからである。

講師には、現場の第一線で文化政策や劇場の改革に取り組んで来られた「実践者」を中心にお迎えし、国内外の多数の事例をご紹介いただき、これまでの貴重な経験と現在のリアルな課題、そしてそれを乗り越えるために取り組んでこられた果敢なる挑戦の数々を短期間に密度濃くお聞きすることができた。

これらの話を聞きながら、愛知芸術文化センターのマネジメントを考えることは、この愛知という地方都市の文化政策を考えることに他ならないということにあらためて気付かされた。老若男女、どのような人をも受け入れる、寛容で創造的な街を創ること、それはそこに暮らす人々を真に幸せにすることにつながっている。そのための拠点として、愛知芸術文化センターはどのように機能すべきなのか。

話はとぶが、1998年、障害者のある方が参加できる〈ダンス・ワークショップ〉で来日した英国のヴォルフガング・シュタンゲ氏にインタビューを行う好機を得た。日本でもようやく「コミュニティ・アート」という言葉が聞かれるようになったそんな頃だ。シュタンゲ氏は自らの活動を「アートへの愛を、分かち合うこと」と語っていた。それはアートをツールとして使用する場合に懸念されるアートの手段的側面を爽やかに吹き飛ばしてくれるようなフラットかつ自由なコメントであった。芸術家とそれを享受するものとの関係は一方通行ではない。アートを通じた相互コミュニケーションによって、互いの存在領域は拡大していくのだ。

あれから14年、あいちトリエンナーレ2010での経験を経て、そこに住む人をも含んだ都市そのものが開かれていく、今その可能性を感じはじめている。愛知県にはすでに立派な箱としての複合文化施設も、国際的なフェスティバルも存在している。今必要なのは、それらを機能的に動かすべき未来を見据えた文化政策とその実現に向けて共に取り組んでくれる沢山の人の力。

そう、「アートマネジメント講座」の終わりは、絶え間なき思考と次なる実践の始まりなのである。



広がる市民との協働

2002年より、愛知県文化情報センターでは、多数のボランティア（サポートスタッフ）が活動が続いている。現在の登録数は100名程度。

2009年よりスタートした「アートマネジメント実践講座」、「あいちトリエンナーレ2010」の開催を経て、芸術を通じての活動はさらに広がりを見せた。

ボランティアやサポーターズクラブの活動にも関わったメンバーも見られ、トリエンナーレ終了後も、そこから自主的な活動が芽吹き、継続されつつある。加えて、あいちトリエンナーレ2010のまちなか会場となった長者町の関係者自身により、まちが自主的に「アートなまち」としての取り組みを継続し仕掛けていくために「長者町アートアニュアル実行委員会」が設立された。

愛知県文化情報センター

サポートスタッフ

愛知県文化情報センターの自主事業催事の運営をサポートするボランティア組織。2002年発足。

あいちトリエンナーレ 2010

サポーターズクラブ

自主的なイベントや勉強会などを企画・運営することでトリエンナーレを盛り上げ支えていくクラブ組織。

あいちトリエンナーレ 2010

ボランティア

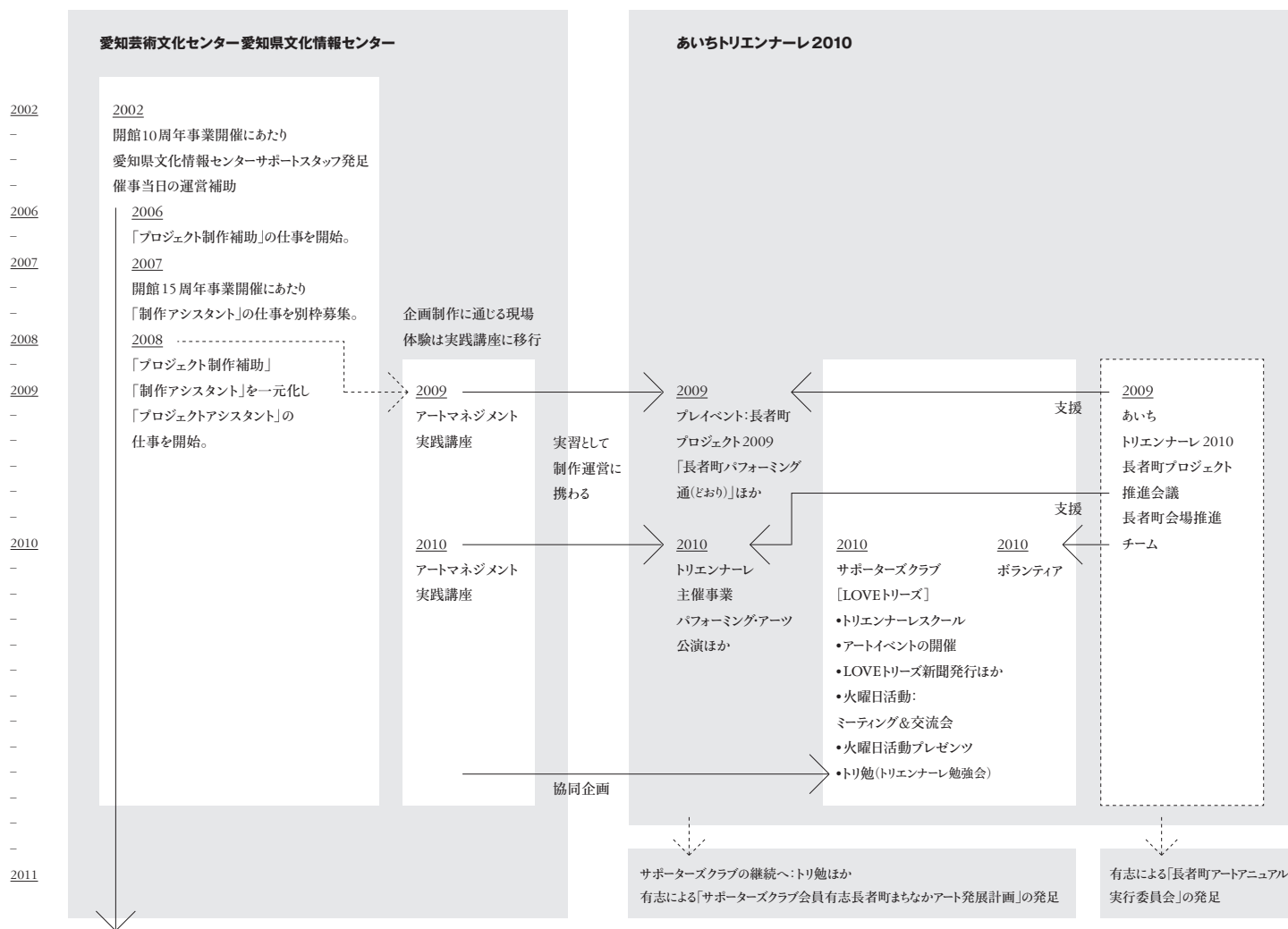
会場運営、ガイドツアー、アーティストサポートなどを手伝うボランティア組織。

あいちトリエンナーレ 2010

長者町プロジェクト推進会議 長者町会場推進チーム

長者町会場でのさまざまなプロジェクトを推進するために設置された会議。その下部組織である長者町会場推進チームが打ち合わせを重ねて様々なプロジェクトに対する支援を行った。





協働の必要性と可能性

藤井明子

芸術文化の可能性が、これまでの芸術を鑑賞して楽しむというだけでなく、様々なところで注目されている…今回開催した基礎講座でも、多くの講師がそうした事例を紹介し経験を語った。社会福祉の分野で音楽やダンスを行うことが生き生きと生活を送る上で大きな効果を生むこと。教育のなかで演劇のワークショップが協調性や主体性を身につけさせること。ロボットの言語能力の開発に演劇が役にたつこと。防災意識を高める取り組みを美術家と一緒にすること。まちとしての地域の安全を高めるためにアーティストの製作拠点とギャラリーを設けたこと。劇場の中での活動としても、プロではないがプロを目指す年配の方や若い人の養成、新しいコミュニティ活動の広場としての役割、ボランティア活動の場など、様々である。

重要なのは、地方の文化芸術拠点としての劇場の役割を考えた場合、こうした芸術のもつ多様な力を、その劇場が果たすべき役割や使命(ミッション)に戦略的に結びつけ、長中期の文化政策を具現化するためのステップという形で落とし込んで行くことなのだと思う。劇場という場所で行えない、芸術文化活動そのもの、新しい芸術文化の創造という劇場の最も重要な役割であっても、多様な形で上記の芸術文化のもつ多様な力、可能性をうまく連携させていくべきだろう。そうすることで、鑑賞者の方々だけでなく、これまで以上に多数の県民とかかわっていくことができると思うからである。

あいちトリエンナーレ 2010では、テーマが都市の祝祭ということで、長者町をはじめまちなかで様々な現代美術の展示やパフォーマンスが行われた。また2000人以上の多数のボランティアが登録し、延べ7000回以上の活動を行った。サポーターズクラブ(愛称「LOVEトリーズ」)もできて、新聞や地図を発行したり、トリエンナーレについて学んだり交流するアートイベントなどを自ら企画してトリエンナーレを脇から応援していた。イベント的な要素をうまく取り入れたことにより、より多くの県民にアピールすることができた。そのボランティアは、2005年に開催された愛・地球博ボランティア経験者も多かったが、他の美術館・博物館での展示解説ボランティア経験者や愛知県文化情報センターのサポートスタッフもかなりいた。文化情報センターのサポートスタッフにはまた、サポーターズクラブの核となるメンバーとして活動した人もいた。あいちトリエンナーレ終了後に行われた「ボランティア等交流会」に参加したとき、年齢やプロ・ボランティアを問わず、様々なところで出会った方々が集い、思いも寄らない形でつながりができていたことに驚かされた。そうしてさらにそのうちの何人かはツイッターなどを使って今も自由に素早くコミュニティを広げつつあるようだ。私はここに一つの可能性を見いだしたい。愛知芸術文化センターという地域の拠点文化施設が芸術を通じて県民の方々をはじめ様々な人とつながり協働していく拠点となること。その具体的な方法はこれからまだまだ検討していかなければならないが、そこにこそ、アートマネジメントの目的があるのだと思う。

発行日 2011年3月14日

発行 愛知芸術文化センター企画事業実行委員会

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター内 文化情報センター
tel.052-971-5511(内725) fax.052-971-5644

編集 藤井明子(愛知県文化情報センター)、唐津絵理(愛知県文化情報センター)、山口佳子(alfalfa)

デザイン 木村稔将

写真撮影 南部辰雄/丸山武久/羽鳥直志/加藤光

平成22年度文化庁芸術拠点形成事業  AGENCY FOR CULTURAL AFFAIRS